「遊び」雑感

遊びの演出者は大自然

吉村　真理子

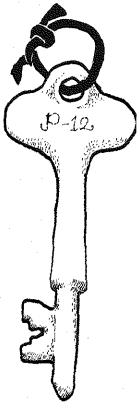
九月の子どもたち

夏休み明けの子どもたちは日焼けして一回り大きくなった姿で登園してくる。やや精悍な表情が保育者の目にまぶしいほどだ。夏休みにどんな体験をしたのだろうか。息せききったように話しかけてくる子や、視線が合うと恥ずかしそうににっこりして再会の嬉しさをそれとなく伝えてくる子もいる。靴箱やロッカーの側で久しぶりの友達と出会って早速「ぼく、飛行機で北海道のおじいちゃんちへ行ったんだよ」「わたし、おねえちゃんと毎日プールに行って泳げるようになったの。

あとでみせてあげるね」「パパとナイター見に行ったんだ。阪神が勝ってパパはごきげん。ぼくは巨人に勝ってほしかったのに」と話がはずんでいる。

やがて、しばらく見なかった保育室内を歩き回ってなじみのものを確認して触ったり、水槽の生き物や小鳥の無事な様子を見て安心したように声をかけていく。園庭に出ると先ず目につくのが植物の変化で「すごーい、ひまわりがこんなに背が高くなってる」「きゃー、おばけきゅうりだ、こんなに大きいよ」「見て、朝顔の種ができてる」「でも、お花は小さくなっちゃったね」などと次々に見て回り、夏休み前の様子と比べている。

これらの行動は言わば遊びの幕が上がる前の序曲のようなもので、その中には遊びに必要な条件やこれからの遊びの内容や方向を示すように旋律が見え隠れしているように思う。すなわち子ども自身の成長に伴う興味関心、保育者に見守られている安心感と信頼、友達と再会した喜び、遊び場となる環境の確認など。



各クラスの様子

年長組では室内の風通しのよい場所やテラスに三々五々座りこんでおしゃべりを楽しんでいる姿からは、久々に仲間といっしょにいられる喜びが伝わってくる。しばらく離れていたことがかえって友達とのきずなを強めたのだろうか。お互いに離れていた期間中の情報を交換し合ってそれを共有することで友情を確かめているのかもしれない。やがて、だれかが「サッカーやろうか」と声

をかけると一斉に外に飛び出す。しかし、遊びは長続きしない。まだ外は真夏の暑さが残っているからだ。いつのまにか木陰にしゃがみ、地面に図形を描きながら陣取りゲームをやっている。おや、この遊びは夏前には見られなかったからきっと誰かが持ち込んだものとみえる。

建物の陰の部分ではベンチを左右に分けて並べ、リーダーが問題を出して両方のチームに当てさせている。テレビのクイズ番組の影響であろう。みんな頭をひねって回答を出し、正否にかかわらずその都度笑い声があがっている。

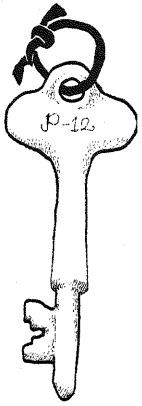
朝顔の種取りをするグループもある。「緑のはまだだめなんだよ。茶色になってカサカサにならないと」「ほら、こんなに種が真っ黒になったら取ってもいいんだよね」と確認しながらカップに入れる。ついでに花がらも摘んでジュースやさんの開店準備をすることも忘れない。

三歳児は暑さと家庭生活の名残りを引きずっているのでまだ活発な動きはあまり見られないが、中には久しぶりに母親の干渉から解放されて大はしゃぎする子もいる。しかし大部分の子どもは保育者の側で絵本を読んでもらったりいっしょにままごとをして過ごしている。そのうち、金魚やうさぎにえさをやりに行ったりしながら普段の調子を取り戻しておしゃべりがはずんでくるが、一か月前と比べると格段に語彙が増えていることに驚かされる。

年中組はといえば男の子が一段とたくましくなり、暑さをものともせず五、六人の群れでエネルギッシュに走り回る姿が目立つ。それも仲間と再会した喜びの表現であろうか。群れて行動するにはリーダーの存在が必要だが、きっと夏休みの体験がリーダーの誕生に結び付いたのかもしれな

い。だれかの提案に（もしくは指示に）したがって何の遊びかよくわからなくても同じように動くだけで十分たのしそうである。これが年長児なら話し合って合意の上で遊びが始められると思うのに、四歳児にはそうした議論はあまり見られない。

もう一つ気づいたのは男女の遊びによる傾向の違いが見え始めたことである。広告紙を丸めた剣、折り紙の手裏剣、画用紙に描いて切り抜いたアニメキャラクターのマスクやベルトなどはほとんど男児専用と言ってよい。ビー玉の場合は男児がゲームに用いて技を磨くのに夢中になるが、女児は形や色を活かしてままごと、お店ごっこの素材として使うことが多い。もちろん、積み木、ねんど、画材、遊具、飼育物への興味などは共通しているのは言うまでもない。



気候の果たす効果

園全体の遊びを見回すと、九月の前半は残暑がきびしいので朝早いうちは園庭全体に子どもの姿が見られるが、日が高くなるにつれ陰の部分に移動して比較的静かな遊びが続けられる。唯一、日なたの遊びはプールやタライの水遊びで、それも気温によって暑い日は大勢で賑わうがちょっと涼しくなると人影がまばらになる。こんな日はお湯のシャワーが大人気だ。

月半ばになり涼風が立ち始めると子どもの動きが急に活発になってくる。日の当たっていた園庭の真ん中にも子どもがあふれている。日光が肌に

気持ち良く感じられるようになったのだ。単純な追いかけっこから次第に条件が難しくなる〝たかおに〟〝いろおに〟〝こおりおに〟へと疲れをしらないように遊びが続いている。この遊びの動きは自由だから暑いと思えば日陰で条件に合うところを見つければいい。ただ走り回るだけでなく条件を充たす方法を考え表現力も磨かなければならない。〝たかおに〟の場合、鬼よりも上にいれば坂道でもいいのかなどの意見も出てにぎやかに話し合うこともある。これらの経験はルール成立の意味を理解するのにとても役立ったのではないだろうか。

運動会前の遊びは走ること

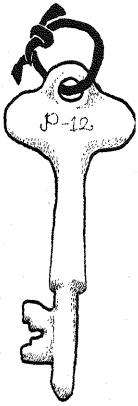
近所の小学校の運動会を見て来た子どもたちから〝リレー〟が持ち込まれると「先生、白い線を描いて」「バトンはないの？」と声があがり、用意をしてやるといつの間にか子どもたちが集まって、とにかく二列に並んで人数や年齢は関係なくエンドレスのリレーが延々と続いている。保育者は、いつ人数や実力を揃えることに気づくのだろうと興味をもっていたのに一向にその気配はない。よく見ていると入れ替わり立ち替わりやりたい子どもが何回か走ってまた他の遊びに移っていくのだがリレーそのものはずっと続いているところがおもしろい。時々列の長さが大きく異なっていることがあり、どうしたことかと不思議に思っていると、走りたくてたまらない子は短い列に、少しくたびれた子は長い方の列に並んでいることに気が付いた。そうすれば休む時間が増えるわけである。リレーといえばすぐにチームの人数を揃え力のバランスを調整し、バトンタッチの方法やラインに沿って走ることを思い浮かべるのは大人の方で、子どもは自分たちの感覚でおおらかに走

る楽しさを存分に味わうための知恵を働かせている。

なるほど毎年初秋のころに運動会が持たれるのもこうした実態があればこそと改めて実感する。涼しくてさわやかな季節になると子どもの身体は動きたくてたまらなくなる。仲間意識も育ち、みんなといっしょに行動することを喜ぶと同時にルールの理解も進んできた結果、集団でのゲームを楽しみ、グループごとの挑戦意欲も盛んになってきた。この子どもたちが全身で表しているサインを受け止めながらいっしょに運動会のプランをたてていきたい。

秋の自然を満喫する

月末近くなると子どもたちの興味は虫取り、種取りに集中してくる。庭の片隅の草むらでバッタ捜しが始まる。残暑がきびしいうちは控えていた散歩も、この好季節を大いに活かさなくてはといそいそ出掛けるようになった。子どもたちのお目当ては虫取りでポリ袋と輪ゴムをちゃんとポケットに入れて行く。先週はなかったのに突然真っ赤な彼岸花が土手に並んでいて「なにこれ？」と驚いたり、出掛ける度に稲の葉が少しずつ黄色味をおび、「なんだかいい匂いがする」と大きく息を吸い込んで目を細める。見上げた空に飛行機雲が幾筋も流れているのを見て「飛行機が絵を描いているみたい」と真っ青な空を見上げ「吸いこまれそうだよ、ぼくも登っていくような気がする」「首が痛くなったよ」などと話しているのを聞くと、保育内容のテーマはまさに秋という季節だと



実感させられる。

あぜ道に入るとばらばらとバッタが跳び出し、帽子でつかまえようとおおわらわ。バッタの方が一瞬早くきちきちとあざわらうように逃げて行くのを夢中で追いかけ、やっとつかまえると大事そうにポリ袋に入れる。「あ、でぶっちょのバッタが入るよ」「それ、いなごだよ」「ウルトラマンの目みたいだね」「やだぁ、茶色のおしっこしちゃったよ」と大騒ぎしている。こんなに虫取りに熱中するのは太古の狩猟本能が残っているのかと思うほどだ。

散歩から帰ると早速獲物を虫かごや飼育箱に移し、さてどうやって飼うのかと知恵をしぼっている。「草を入れてやろうよ」「水は?」「何食べるんだろう」と。しかし、翌朝になると「動いてないのがいるよ、死んじゃったのかな」「もう逃がしてやろうか」と花壇のすみに空けてそれきり忘れてしまう。そしてまた次の日もポリ袋をもってあきもせず虫取りに出掛けて行く。リレーという形ではなくただ走るのを楽しんだように、生命の尊さ云々よりも夢中で虫を追いかけることの方がはるかに子どもらしく健全だと思う。

園庭の夏の花や野菜は枯れてかさかさと秋風に吹かれ、子どもの興味をつなぎとめているのはかろうじて種だけでフィルムの空き容器にせっせと集められる。季節の変わり目がこんなにはっきり感じられるのは他にないのではないか。ここしばらくは運動会ごっこはお休みにして十分に秋を満喫しよう。十月になり運動会が目の前に迫ってきたら今度は競走としてのリレーに闘志を燃やして遊ぶに違いないと楽しみにしている。

（元松山東雲短期大学）